

【歴史・民俗】

## 幕末期における酒造家と廻船経営

— 盛田家文書の船勘定帳の分析 —

日本福祉大学経済学部 教授

日本福祉大学知多半島総合研究所歴史・民俗部 部長 曲田 浩和

## はじめに

尾張酒は江戸下り酒の許可を受けた一つである。尾張は寛政期(1789年～1801年)以降、摂津に次ぐ数量の下り酒を江戸に供給していた地域である。江戸への酒を運ぶ廻船の特徴として歩持が指摘されている。廻船の歩持とは、複数の船主が共同で廻船を持つことである。

村瀬正章は、「海運の利用がこの地方の下り酒造業の発達の条件であったから、三河の酒造家たちは、廻船を支配することを指向した。しかし、それは彼らが海運業に進出するのではなく、廻船に出資・融通することで船頭を系列化することであった」と記している<sup>(1)</sup>。

次の史料は、刈谷の酒造家である太田平右衛門家の史料であり、1826年(文政9年)の福重丸の歩持の様子を記している。

【史料1】<sup>(2)</sup>

## 分持加入方覚

一三分	田嶋五兵衛
一壺分五厘	神谷惣助、吉兵衛
一五厘	神谷文助、同兵助
一六厘五毛	田嶋庄七
一五厘	都築三郎兵衛
一六厘五毛	岡本権四郎
一五厘	太田平右衛門
一貳分七厘	船頭喜十郎仕配

ノ

惣<sub>二</sub>船持候事致間敷事、分持<sub>二</sub>も致間敷事  
 新田築候事、是又堅致間敷事  
 一大船壺艘持致分持事無用  
 一小船・川船<sub>二</sub>至迄船持事  
 一浜方大網持致事  
 右三ヶ条子々孫々<sub>二</sub>至迄堅無用

この史料は太田家の子孫に伝える「家訓」であり、船持になつてはならず、歩持であっても行つてはならないとしているが、実際には船の歩持を行つていた。福重丸の加入者は、高浜の酒造家である田嶋五兵衛(30%)、有脇(半田市)の酒造家である神谷惣助(15%)、和泉(安城市)の酒造家である都築三郎兵衛(5%)、刈谷の酒造家である岡本権四郎(6.5%)、太田平右衛門(5%)、田嶋庄七(6.5%)は田嶋五兵衛の、神谷文助(5%)は神谷惣助のそれぞれ一族と思われる。そのほかに船頭喜十郎(27%)である。「仕配」は船の管理者のことであり、福重丸の場合船頭が船の管理者を兼ねていた。船主は7名であり、地域の異なる酒造家が船の分持ちを行つていたことが明らかになる、()内の数字が船の共同経営の出資金比率である。醸造家が船の歩持を行つている特徴的な史料といえる。

本稿では尾張国知多郡小鈴谷村(常滑市)の盛田久左衛門の歩持について考える。盛

田家では延宝5年(1677年)から天和元年(1681年)までは酒造業を行っている形跡はあるが<sup>(3)</sup>、その後継続しているかどうかは確認できず、酒造業が恒常的に行われている状況が確認できるのは、1732年(享保17年)以降である。その後、盛田久左衛門家分家の太助に酒造りを始める支援をした。小鈴谷村では、盛田久左衛門家が中心となり、酒造業を村の産業とすることで、荒廃していた村の再建が図られた<sup>(4)</sup>。

篠田壽夫は、盛田家では、18世紀は江戸積み酒が多かったが、江戸市場の収縮にともない、三河に市場を移した。その後、天保期以降に江戸積み酒を増やしたことを明らかにした<sup>(5)</sup>。

江戸への酒を運ぶ船を確保する必要があり、盛田家では自らの船を持っていた。現在確認できる船は4艘であり、いずれも歩持の船である。金光丸、富士宮丸、乗宝丸、慶久丸の4艘である。

金光丸は1821年(文政4年)に新造された廻船であり、石高は不明である。新造に際しての出資を行い、内海の吉田三郎右衛門が2分(20%)、盛田太助と盛田久左衛門が4分ずつ(40%)であった<sup>(6)</sup>。盛田太助は盛田久左衛門の分家であり、吉田三郎右衛門は10代盛田久左衛門の母の里方であった。金光丸は盛田久左衛門一族の廻船といえる。その後、歩持は5人となり、盛田久左衛門の分家の盛田権六が加わった。5人の出資金比率は20%ずつであった。

富士宮丸は盛田家中榎又左衛門の共同所有の船であった<sup>(7)</sup>。中榎家では文化・文政期(1804年～1830年)に、310石積・490石積の2艘の富士宮丸を共同所有していた。その後、1843年(天保14年)に藤次郎船を100両で購入し富士宮丸とした。船

の修理や出帆準備金を含め、300両が計上された。

富士宮丸は、船元の中榎半蔵、中榎又左衛門、中榎又左衛門(酢屋)と盛田久左衛門と分家の太助の共同所有であった。2代中榎又左衛門は盛田久左衛門からの養子であり、親戚関係での歩持である。中榎家側の歩持の比率は不明であるが、盛田家は全体の25%で、久左衛門と太助で折半した。

富士宮丸は1847年(弘化4年)に新造し、出帆諸経費を含め、1011両余が計上されている。船を大型化したものと思われる。

出資金比率は船元の中榎平蔵が20%、中榎又左衛門が30%、盛田久左衛門が20%、盛田太助が10%、船の名義人の井野屋安右衛門が5%、船頭為助が10%であった<sup>(8)</sup>。

本稿では、おもに幕末に使われた乗宝丸と慶久丸の2艘の勘定帳を用いて、歩持経営の分析を目的とする。幕末は江戸積みの知多酒が好調な時期であり、そのなかで酒造家の酒輸送についてどのような手立てをとっていたのかを考える。

## 1. 「乗宝丸勘定帳」の分析

乗宝丸は1859年(安政6年)に新造された船である。詳細は「乗宝丸勘定帳」の冒頭に記されている。

### 【史料2】<sup>(9)</sup>

目出度	
乗宝丸勢三郎船	
新造千式百石船	
安政六年己未三月鋪居	
同	十一月中之汐おろし
同	十二月初下り
三分三厘	船元半田

## 村竹屋栄造

三分三厘 多屋船頭 清三郎

三分三厘 手前

以上

【史料2】によると、乗宝丸は1200石積みの大型船である。船元は半田の村竹屋(竹本)栄造がつとめ、村竹屋、多屋(常滑市)の船頭清三郎、盛田久左衛門が3分の1ずつ出資した。

乗宝丸の新造にあたっては、中古の井宝丸を335両で購入した。その船の部材・道具を転用した上で、船を建造した。初期費用としての造船・道具・出帆までの諸経費の合計は金979両3分と銀10匁3分2厘であった。村竹屋、船頭清三郎、盛田がそれぞれ金400両ずつ出資をし、残金220両と銀4匁6分8厘は船頭の中荷金とした。

中荷金とは船頭に預けられた買付資金のことである。買積みの場合、その場で資金が必要になることもあった。その場合懇意の廻船問屋に借金をすることもあったが、船頭はある程度の資金を持って運航していた。

【表1】は、乗宝丸の運行による損益を示したものである。1859年(安政6年)12月の初下りから1866年(慶応2年)までの登りまで、知多半島から江戸を40回往復した。ちなみに下りは江戸行であり、登りは伊勢湾行である。

下り・登りともに運賃積みと買積みがあり、それぞれの損益の状況が記されている。下り運賃徳、下り売徳、登り運賃徳、登り売徳のそれぞれの合計から諸雑費を差し引いたものが損徳となる。

下りの運賃積荷物はそのほとんどが樽酒であった。酒造家の持船であり、自らの酒

を優先的に運ぶことを目的とした船である。そのほかの荷物については史料上確認できる限りでは、買積荷物は米と瓦、登りの運賃積荷物は明樽、登りの買積荷物は大豆、メ粕である。

下り運賃徳は安政から元治期(1854年～1865年)にかけて金80両から金90両であり、安定した収入が得られた。慶応期(1865年～1868年)に入ると物価上昇の影響があり金100両を超えた。下り売徳は、数両から十数両の収入であった。登り運賃徳は数両から十数両の収入を確実に得ることができた。登り売徳は5番登りや19番登りにみられるように金100両を超える収入を得られることもあったが、40回下りの内7回に損金を出している。その結果、全体の損益が赤字になることもあった。

乗宝丸はあくまでも下り運賃による利益が主であり、そのほかは状況に応じて荷物を積んでいたことがわかる。

乗宝丸の場合、登り下りの往復(全40回)の内、7回の船主への利益金の配当を行っている。平均すると一人あたり金80両ほどである。40回を終えたところで最後の37番～40番の徳金の1割(金21両)を船頭に渡している。礼金の意味であろうか。

1864年(元治元年)7月～11月(31番と32番の間)に中作事を行った。廻船は新造してから5～7年ほど立つと大がかりな修繕を行う、船は木を曲げることで密閉度を高め、水の浸入を防いでいる。桶・樽から液体が漏れない構造と同じである。したがって、年月が経つと密閉度が弱くなるため、船を解体してもう一度締め直すのである。その際に痛めた箇所を修理したり、船道具を新調した。修理の場所は明らかにならないが、大工は延790人、船の修理費、

表1 乗宝丸の運行形態別損益表

順番	出帆日	西暦	下り運賃徳	下り売徳	登り運賃徳	登り売徳	損徳	備考
1番上下	安政6年12月	1859年	83.00/85.3	14.25/7.6.0	10.25/9.5.3	30.00/11.8.0	75.50/14.9.2	下り売徳(糯米)
2番上下	安政7年2月	1860年	91.25/29.3		9.00/3.4.4	▲13.75/7.5	13.25/5.9.5	
3番下り	万延元年3月		87.00/12.0.7	3.75/0.8.8	11.75/6.3.4	4.00/10.9.2	39.50/5.1.2	下り売徳(米)／登り売徳(ノ粕)
4番上下	万延元年4月		91.25/6.6.1		1.00/		30.25/8.1.4	登り運賃徳(明樽)
5番上下	万延元年7月		85.00/8.3.0	11.00/	7.75/7.8.9	101.75/2.1.2	135.75/10.2.9	
6番上下	万延元年9月		76.50/11.3.0		8.75/8.6.7	11.50/10.3.7	41.75/7.1.9	
7番上下	万延元年11月		74.75/5.4.0		9.75/8.2.4	3.75/14.0.2	39.00/11.1.9	
8番上下	万延2年正月		79.75/11.8.3		7.50/6.9.2	10.50/5.3.5	20.75/12.5.7	
9番上下	文久元年3月	1861年	64.25/12.6.9	11.25/7.2.9	6.75/12.5.0		4.50/13.6.6	売損(25両2分と12匁7分6厘)
10番上下	文久元年4月		67.50/7.1.5	6.75/1.2.4	1.75/12.5.3	9.50/0.3.6	33.50/5.6.5	下り売徳(瓦売)
11番上下	文久元年6月		72.75/14.4.6			11.00/4.4.7	35.25/15.5.7	登り売徳(大豆)
12番上下	文久元年7月		66.25/10.5.7	4.75/6.3.3			34.25/6.2.3	登り売徳(瓦)
13番上下	文久元年8月		78.50/9.6.4		11.50/12.1.8	▲1.00/2.0.4	39.00/2.0.8	
14番上下	文久元年8月		61.25/5.9.1	17.50/2.0.0	11.50/7.4.7	20.50/1.8.1	61.50/3.0.5	登り売徳(大豆)
15番上下	文久元年12月		78.75/8.5.9	13.00/7.4.7	8.25/0.4.8	4.25/2.2.6	44.00/3.6.7	
16番上下	文久2年3月	1862年	75.00/12.7.2	11.75/13.1.1	4.00/3.8.0	▲6.75/4.9	24.50/1.4.3	
17番上下	文久2年4月		83.50/8.0.5		3.25/0.7.9	23.00/2.5.2	79.75/10.5.2	
18番上下	文久2年6月		78.75/12.3.1	4.00/14.3.9	10.75/7.1.6		48.00/6.6.2	
19番上下	文久2年8月		78.75/6.1.5	1.50/1.3.5	6.00/8.9.1	6.75/1.3.3	42.50/13.2.6	
20番上下	文久2年閏8月		81.75/9.1.5		12.00/10.0.5	132.00/9.6.2	173.75/0.1.1	
21番上下	文久2年10月		77.25/11.1.8	3.75/0.0.7	16.50/4.3.3	▲21.75/14.2.7	▲21.50/6.5.2	登り運賃徳(為替金利共)
22番上下	文久3年正月		84.25/13.9.6		7.50/1.1.8	▲49.75/12.4.1	▲8.25/13.9.4	
23番上下	文久3年3月	1863年	81.00/5.8.6		3.00/2.0.0	2.00/6.4.2	32.75/7.0.7	
24番上下	文久3年5月		79.75/12.6.7	1.75/5.0.0	3.25/5.7.7		37.50/11.4.5	下り売徳(瓦)
25番上下	文久3年7月		82.25/4.2.2		4.50/6.8.1		39.75/6.0.2	
26番上下	文久3年8月		80.00/14.9.8		15.00/		45.25/14.3.1	
27番上下	文久3年10月		81.25/12.8.6	1.50/12.7.7	6.50/0.7.9	2.00/6.3.6	32.25/2.3.3	
28番上下	文久4年正月		88.25/8.1.1		9.00/0.5.0		41.00/0.1.1	
29番上下	元治元年3月		88.00/8.4.4		4.75/12.3.7		40.00/14.1.7	
30番上下	元治元年5月	1864年	92.25/14.3.2		1.50と9.4.0		42.25/11.3.0	
31番上下	元治元年7月		85.50/2.6.7		5.25/2.9.0	12.50/8.9.7	56.50/1.5.0	
32番上下	元治元年11月		95.50/8.0.3		11.00/0.0.8	6.00/3.5.3	29.75/13.3.6	
33番上下	元治2年2月	1865年	117.75/9.3.6		6.25/1.7.5	3.75/9.7.4	61.75/0.5.2	
34番上下	元治2年4月		124.50/12.7.6		10.75/4.0.1	▲5.00/2.9.8	59.50/8.3.7	
35番上下	慶応元年閏5月		113.75/11.9.1		3.50/3.7.5		56.25/3.5.6	
36番上下	慶応元年6月		98.25/7.6.0	21.50/2.2.7		13.50/12.3.0	73.25/0.0.4	登り売徳の内(大豆9両1分と8匁7分)
37番上下	慶応元年8月		117.50/4.8.5		19.50/3.0.1	8.75/3.7.5	72.50/12.6.6	
38番上下	慶応元年11月		133.25/2.1.0		9.25/3.7.5		31.50/3.7.0	
39番上下	慶応2年2月	1866年	135.00/4.7.1		20.75/14.1.9	27.00/4.7.2	78.00/6.1.5	
40番上下	慶応2年4月		140.75/2.8.2		31.00/8.6.8	▲33.50/11.6.2	19.25/9.1.2	

出典：「乗宝丸勘定帳」(盛田家文書)

注：各徳金の数字は、金／銀とした。金は両と分であるが、分は4進法のため、1分は.25、2分は.50、3分は.75で表わした。また銀は、匁.分.厘とした。

▲はマイナスを示した。

道具代、出帆までの経費を含めて中作事料の総額金 267 両 3 分と銀 7 匁 9 分 5 厘であった。

一人当たり 7 回の配当の合計は金 591 両 2 分と銀 11 匁 4 分 7 厘であった。そのうち、最初の出資金 400 両と中作事料 89 両 1 分と銀 2 匁 6 分 5 厘の合計 489 両と銀 2 匁 6 分 9 厘を差し引くと、金 102 両 1 分と銀 1 匁 1 分 7 厘の利益となった(【表 2】)。中荷金の精算を行っていないが、徳金のなかに含まれているものと思われる

## 2. 「慶久丸勘定帳」の分析

慶久丸は、1860 年(万延元年)3 月に熊野村(常滑市)の孫左衛門より多屋の井上源次郎と盛田久左衛門に名義が変更された船である。

【史料 3】<sup>(10)</sup>

万延元年  
庚申三月  
多屋村  
片棚持 井上源次郎  
片棚 手前

五百石船

熊野 孫左衛門より買請

沖乗船頭

多屋村喜代藏

名前

慶久丸源重郎

【史料 3】によると、慶久丸は 500 石積みの中規模廻船で、船頭は喜代藏がつとめ、船名は慶久丸源重郎であった。

「慶久丸勘定帳」には船の購入代金は金 271 両であり、そのほか出帆までの諸経費が約金 40 両が計上されており、金 312 両と銀 7 匁 8 厘が初期費用であった。井上源次郎と盛田久左衛門が金 200 両ずつ負担した。残りの金 87 両余は船頭中荷金となった。

【表 3】は慶久丸の運行による損益を著したものである。1860 年(万延元年)から 1866 年(慶応 2 年)までの 28 回の知多半島と江戸の往復の収支状況が明らかになる。「乗宝丸勘定帳」とは異なり、運賃積荷物

表 2 乗宝丸の船主 1 人当たりの収益表

配当・出資	徳金	配当金(1人分)	出資金(1人分)	備考
出帆準備			▲400.00/	
1番～5番	294.75/14.44	98.25/4.81		配当日:万延元年10月21日
6番～12番	210.00/12.06	70.00/4.02		
13番～19番	293.50/12.14	97.75/9.05		
20番～26番	321.75/1.60	107.25/0.53		船道具代差引23両
27番～31番	212.25/14.41	70.75/4.80		
中作事料金			▲89.25/2.65	
32番～36番	280.75/10.85	93.50/8.62		
37番～40番	160.50/5.97	53.50/1.99		船道具と船頭1割引差引41両10匁6分6厘
合計	1774.50/11.47	591.50/3.82	▲489.25/2.65	船主1人分の利益は102両2分と1匁1分7厘

出典:「乗宝丸勘定帳」(盛田家文書)

注:徳金などの数字表記は表 1 と同じ。

と買積荷物別の記載がない。慶久丸は500石積廻船の中型廻船のため、下り徳は金40両から金50両ほどの安定した収入が得られ、慶応期には金70両から金80両に増収した。登り荷物は5回ほど損金を出しており、その回はいずれも赤字である。諸雑費の差引を考えると、登り荷物で収入が得

られないと全体の赤字とつながった。下り荷物のみでは利益は得ることができなかった。28回の運行の平均利益は金18両ほどであり、1回の1人当たり金9両ほどの利益であった。

慶久丸に関しては、以下の史料が残されている。1862年(文久2年)10月に盛田久

表3 慶久丸の運行形態別損益表

順番	出帆日	西暦	下り徳	登り徳	損徳
1番上下	万延元年3月24日	1860年	37.50/0.2.0	1.25/5.4.7	▲32.00/3.6.9
2番上下	万延元年5月22日		41.75/5.1.2	35.00/6.7.9	39.25/5.3.0
3番上下	万延元年7月5日		46.50/12.2.0	70.00/	48.00/8.7.8
4番上下	万延元年9月11日		38.75/10.9.4	20.50/3.9.2	22.00/10.6.4
5番上下	万延元年11月22日		48.25/4.4.8	▲14.00/1.5.4	▲16.25/3.2.3
6番上下	万延元年12月18日		53.00/12.3.6	30.50/0.1.1	23.50/2.3.3
7番上下	万延2年2月18日	1861年	57.50/14.9.5	▲22.00/10.7.5	▲11.25/6.8.7
8番上下	文久元年4月6日		21.25/13.5.5	25.75/0.7.1	1.50/2.3.9
9番上下	文久3年8月11日	1863年	41.25/0.8.9	19.50/14.1.6	21.50/10.5.8
10番上下	文久3年9月25日		44.50/10.5.2	3.00/10.5.2	/▲0.3.4
11番上下	文久3年10月25日		48.00/4.1.7	15.75/2.6.1	21.25/6.5.7
12番上下	文久3年12月朔日		43.25/12.6.4	16.00/12.0.9	9.75/1.2.7
13番上下	元治元年2月10日	1864年			▲8.50/13.1.7
14番上下	元治元年5月15日		42.50/7.5.5	6.25/3.5.3	9.50/2.1.0
15番上下	元治元年7月4日		58.00/13.2.3	10.75/10.5.2	23.50/11.3.7
16番上下	元治元年7月19日		67.50/10.1.3	7.00/10.8.7	28.00/3.2.6
17番上下	元治元年9月19日		45.25/13.3.6	▲3.00/6.4.0	/▲8.7.1
18番上下	元治元年11月23日		132.00/13.6.3	8.50/7.2.1	22.75/0.6.5
19番上下	元治2年2月	1865年	67.00/2.8.7	17.25/14.4.2	18.00/4.3.2
20番上下	慶応元年4月21日		65.25/11.7.5	22.50/10.6.3	33.00/13.1.9
21番上下	慶応元年閏5月10日		108.50/2.4.7	8.50/14.0.1	54.50/12.7.6
22番上下	慶応元年6月		57.00/0.8.9	64.25/13.6.5	70.75/13.9.3
23番上下	慶応元年		58.50/10.5.7	94.50/8.8.6	97.00/4.6.5
24番上下	慶応元年11月11日		64.25/12.2.1	▲11.25/5.0.0	▲8.75/5.9.8
25番上下	慶応元年12月朔日		49.00/1.0.3	54.75/8.0.3	9.75/14.7.6
26番上下	慶応2年1月18日		77.25/6.8.1	46.25/11.1.5	60.50/8.8.5
27番上下	慶応2年3月19日	1866年	82.25/6.7.9	72.75/13.4.8	70.75/2.7.6
28番上下	慶応2年4月29日		73.25/5.0.9	▲104.50/9.6.8	▲120.00/4.4.6

出典：「慶久丸勘定帳」(盛田家文書)

注：徳金などの数字表記は表1と同じ。

13番下りの「下り徳」「登り徳」は熊野行のため記載なし。

左衛門、茂兵衛、伊助から浦賀（神奈川県）の宮原屋吉三郎、恒太郎に宛てた書状である。

【史料4】<sup>(11)</sup>

去ル申年慶久丸源十郎船へ魚油四拾八挺也下店へ向け御積送りニ相成、其後御積付御差出し被成候よし、右<sub>者</sub>御積付書御案内も参着可仕、尤同人船<sub>が</sub>一向体ニ無之如何事哉、御積付参着仕候得<sub>者</sub>右船登り次第相尋候へ共、右之振合ゆへ一向不存、昨年五月以来御尋被下、其節同人<sub>江</sub>相尋候へ<sub>者</sub>名古屋大野屋藤七方へ上ヶ置相成よし申居、右之儀其段御店様へいさゝ申上参候事<sub>ニ</sub>御座候付…

【史料4】の申年とは1860年（万延元年）のことであり、昨年（1859年）の5月以来お尋ねとあることから、1番登りの積荷物に魚油48挺があったものと思われる。魚油は積付が盛田久左衛門宛に出されているが、盛田久左衛門に届いておらず、船頭に尋ねたところ、名古屋の大野屋藤七で水揚げされたとし、詳細は店に伝えたと言っている。

登り荷物として浦賀から魚油が運ばれたことを示す史料である。ただし、荷物の行方について1年以上が経過しても決着していない。江戸への下り荷物、とくに醸造品については恒常的に手製の酒を積んでいると思われ、管理されていたのかもしれないが、登り荷物については積荷の把握は不十分であった。勘定帳は船が作成し、慶久丸の場合、下り登りの往復（全28回）の内、5回の船主への利益金の配当を行っている。

13番登りの後に中作事を行っている。次の史料が13番下りと登りの徳金と中作

事料などを記している。

【史料5】

亥八月九番上下<sub>分</sub>  
 子二月拾三番上下迄  
 五上下  
 〆五拾三両三分 徳  
 壺匁四厘  
 一八拾七両三分 仲荷金  
 七匁九分貳厘  
 〆百四拾壺両貳分  
 八匁九分六厘  
 内百三拾四両三分 作事入用<sub>メ</sub>  
 六分三厘 帳下ニ記ス  
 引<sub>メ</sub>六両三分  
 八匁三分貳厘  
 一五拾両 手前<sub>分</sub>持出  
 一五拾両 井上源治郎<sub>分</sub>持出  
 〆金百六両三分  
 八匁三分貳厘 中荷金  
 右井上源治郎より持参之帳面之通り写

中作事は樽水の大工の善五郎がつとめ、手間賃は金69両1分と銀5匁2分9厘支払った。そのほか、修繕に必要な材木・釘・銅板などの材の代金が支払われた。最終的な中作事料は金134両3分と銀6分4厘であった。

28番登りの航海が終わった時点で、盛田久左衛門の慶久丸の船主としての契約は終了した。慶久丸は金220両、船道具は金220両で売り払い、代金が久左衛門と源次郎の配当となった。さらに中荷金181両2分と銀3匁6分1厘を加えられた。23番上下から28番上下までの徳金109両2分と銀5匁5分があり、5回目の配当は一人当たり金366両2分と銀4匁4分であっ

た。すべての航海の徳金を合わせ、一人当たりの配当金は金 554 両と銀 4 匁 2 分となる。船の購入資金を含めた出帆準備金 200 両、中作事料 50 両、中荷金 60 両の金 310 両が船の支出金となる。差し引きすると、一人当たりの利益は金 244 両と銀 4 匁 4 分であった(【表 4】)。

### おわりに

幕末の江戸積みの知多酒は好調であった。1846 年(弘化 3 年)には 62789 樽で、その後 1895 年(安政 6 年)には 131424 樽に増加した<sup>(12)</sup>。

1847 年(弘化 4 年)ころには、盛田家の江戸への出荷量は 1000 樽を超えている<sup>(13)</sup>。幕末の出荷量は明らかにならないが、1861 年(万延 2 年)の酒造米高は久左衛門は 860 石 3 斗、分家の太助は 1228 石 4 斗であり、合計 2088 石 7 斗と酒造米高は 2000 石を超えていた<sup>(14)</sup>。酒造米高とは 1 年間に酒造りを行うための原料米の上限石数のことであり、実際の酒造高とは異なる。

こうした状況のなかで、盛田家では多くの酒を江戸に運ぶ必要があった。とくに幕

末は、尾張からの江戸積み酒の増加への対応として、廻船の確保と効率の良い輸送が求められた時期である。

樽廻船研究においても、酒荷の輸送手段を確保することは、江戸における酒価の変動と入津状況に応じた酒荷販売の有利性を増すことが指摘されている<sup>(15)</sup>。このことは上方の酒造家に限らず、知多半島の酒造家にとっても同様のことがいえる。幕末期に乗宝丸(1200 石)と慶久丸(500 石)の持ち船はその対応であったと考える。

幸いにして、乗宝丸(40 回の下り登り)、慶久丸(28 回の下り登り)は破船せずに、順調に航海を進めた。そのため、盛田家では自らの酒を積むという本来の目的だけではなく、船からの収入を得ることができた。乗宝丸は金 102 両余、慶久丸は金 244 両余であった。乗宝丸の収入のほとんどが江戸行の運賃積み荷物である。江戸行の買積み荷物として、米や瓦を積んでいるが、運賃積み荷物に比べはるかに少ない。また、登りは干鯛・メ粕や大豆が積まれるが、収入は少なく、不足分を出すこともあった。

内海船や野間船などの廻船業を本業とす

表 4 慶久丸の船主 1 人当たりの収益表

配当対象	徳金	中荷金	配当金(1人分)	出資金(1人分)	備考
出帆準備		87.75/7.9.2		▲200.00/	
1番上下～3番上下	55.25/10.3.9		27.50/12.6.9		
4番上下～8番上下	19.50/4.2.2		9.75/2.1.1		
9番上下～13番上下	53.75/1.0.4	106.75/8.3.2		▲50.00/	中作事入用134両3分と6分3厘
14番上下～22番上下	256.50/10.2.9	183.50/3.6.1	150.00/	▲60.00/	
23番上下～28番上下	(109.50/5.5.0)				船玉代220両、道具代220両、中荷金181両2分と3匁6分1厘
精算	733.00/9.0.1		366.50/4.4.0		
計			554.00/4.2.0	▲310.00/	1人分(配当-持出):244両と4匁2分

出典:「慶久丸勘定帳」(盛田家文書)

注:徳金などの数字表記は表 1 と同じ。

る船主は、このような買積荷物でいかに収益を上げるかを考える。相場情報をつねに書状でやりとりする。複数ある持ち船は船主自らが責任が取れるように分持ちをせず、一手で船を持った。醸造家を本業とする盛田家では下り荷物の手酒を運ぶことが最優先であり、上りの荷物は二の次であった。このことは盛田家のみならず、醸造業を本業とする醸造家共通のものと考えている。

柚木学<sup>(16)</sup>は、樽廻船は摂津十二郷酒造家＝荷主の支配を強く受けなければならなかったとを記している。灘・西宮の酒造家たちは江戸行き酒積み船の樽廻船を確保することが必須であった。酒造家の持船だけでなく、持船以外の加入船も多くみられた。酒造家が大勢で廻船に出資し、その配当を得るという方法である。徳用配分型の廻船加入とよばれている。酒造家が共同で船を持ち合うという意味では歩持であるが、一人当たりの加入者が1～2.5%と出資者比率が非常に少ない。安政期以降は、廻船加入形態が年賦償還型へと変化した。年賦償還型は加入金に利子を付けて一定の年数を経て返還する方法である。

加藤慶一郎<sup>(17)</sup>は、年賦償還型は幕末期特有のものであり、高騰する運賃を抑制するための酒造家側の方策であるとし、明治初期には再び徳用配分型に復すという。

また、上村雅洋<sup>(18)</sup>は幕末の魚崎の事例をもとに、酒造家の手船による同族荷物の優先的な輸送状況を明らかにしている。知多半島では、幕末期の好調な酒造業を背景に酒造家のグループ化が進められている。この点についても考える必要がある。

1856年(安政3年)11月から翌年10月までの1年間の摂津からの江戸積み酒は

100万樽を超えた<sup>(19)</sup>。尾張からの江戸積み酒は約10万樽であった。摂津からの江戸積み酒は尾張の10倍であり、比較にはならないが、酒造家と廻船の関係を考えるうえで参考になる。

また、尾州廻船にはさまざまな船があり、その多様性を解明していく必要がある。知多半島の地域に、内海船、野間船、常滑船などの廻船集団があり、その性格がそれぞれ異なる。そのうえで、知多半島の主要産業の醸造業を支える廻船を考える必要がある。

一つは、亀崎船・半田船などの江戸行酒積み船との関連である。盛田家・中埜家と分持ちしていた富士宮丸の船頭為助は本拠を亀崎としていた。奥立廻船、尾張小早といった廻船の存在は知らされているが<sup>(20)</sup>、その実態は判然としない点が多い。

二つめは、乗宝丸、慶久丸ともに、船頭は多屋の出身者であり、これまで性格が明らかにされていない廻船である。多屋船が常滑船と同様に扱われる場合もあれば、独自の集団として捉えられる場合もある。

多屋船の実態を把握することで、酒造家と廻船の関係解明につながる可能性がある。いずれにしても今後の課題である。

## 注一覧

- (1) 村瀬正章『伊勢湾海運・流通史の研究』(法政大学出版局、2004年)。
- (2) 「分持加入方覚」愛知県史編さん委員会編『愛知県史』資料編18近世4西三河(愛知県、2003年)史料番号249。
- (3) 愛知県史編さん委員会『愛知県史』資料編17近世3尾東・知多(愛知県、2010年)史料番号150。

- (4) 拙稿「18世紀における知多地域の変容と酒造業の展開－小鈴谷村の場合」(『知多半島の歴史と現在』No.16、2012年)。(『安城市歴史博物館研究紀要』20号、2014年)。
- (5) 篠田壽夫「知多酒の市場－盛田久左衛門の場合」(『豊田工業高等専門学校研究紀要』第16号、1983年)。
- (6) 「金光丸勘定帳」盛田家文書。
- (7) 日本福祉大学知多半島総合研究所・博物館「酢の里」編著書『海と川 船がつなぐ世界』〈中埜家文書にみる酢造りの歴史と文化4〉中央公論社 1998年。
- (8) 「富士宮丸勘定帳」盛田家文書。
- (9) 「乗宝丸勘定帳」盛田家文書。
- (10) 「慶久丸勘定帳」盛田家文書。
- (11) 「書状留」盛田家文書。
- (12) 「江戸に送られた名産品」『新編安城市史』2通史編近世(安城市、2007年)。
- (13) 篠田前掲論文。
- (14) 「今知多郡酒造家所持之株札覚」愛知県史編さん委員会編『愛知県史』資料編17近世3尾東・知多(愛知県、2010年)史料番号153。
- (15) 柚木学『近世灘酒経済史』(ミネルヴァ書房、1965年)。
- (16) 柚木学『近世海運史の研究』(法政大学出版局、1979年)同『酒造りの歴史』(雄山閣出版、2000年)。
- (17) 加藤慶一郎「樽廻船の加入形態に関する一考察」(『流通科学大学論集－人文・社会・自然編－』第20巻1号、2007年)。
- (18) 上村雅洋『近世海運史の研究』(吉川弘文館、1995年)。
- (19) 日本福祉大学知多半島総合研究所・博物館「酢の里」編著書『酒と酢 都市からた農村まで』〈中埜家文書にみる酢造りの歴史と文化5〉中央公論社 1998年。
- (20) 拙稿「尾張・三河の酒造業と奥立船」